

28) DMP 症児の進行期における心理・行動 の変化に関する研究

国立療養所 宇多野病院

鞠山紀子

< 研究目的 >

独立歩行が可能な状態から、次第に歩行困難となり、日常生活の移動動作すべてに車椅子を使わなければならないという事態に直面した時、患児達はその顕著な変化をどの様に受け取め、対処していくかについて彼らの行動観察及び家族とのかかわりの中から捉え、彼らの情緒面での安定を図り、より広い視野を持って豊かに成長していくための援助の方法を考え、試み、「生活指導」というものを深める。

< 内 容 >

独歩→車椅子の移行期にある、D型男子の患児4名を対象に昨年より、①日常の言葉、②周囲の友達や大人に対する態度、③興味の対象、④行動範囲、⑤学習に対する意欲等の面でみられる変化を中心に観察を続け、主に「本」「読書」を通しての指導を試みているが、これまでに逃避的傾向を示した患児、攻撃的傾向を示した患児の両者に、自分の持つ知識を確かなものにし、より多く深く吸収しようという積極的な姿勢が生じてきており、また、両者のつながりにも、互いに協力し、意見、情報の交換をしながら同じ興味に向かうという好ましい状態になってきている。

しかし、これらの患児にとって情緒面での安定と成長を促していく上でのもう一つの大きな作用は家族に有ると考え今回は、家族との面談、外泊時の家庭との連絡ノート等を使ってその変化を捉えてみた。

それによれば、子どもの症状の進行に動揺しながらも、訓練、学習の場でのひたむきさに逆に勇気づけられ、外泊中の時間の過ごし方、接し方をみつめ直そうとしている。

外泊の度に子ども中心の特別な計画をたて家族全員で行動するのではなく、一日の生活の中で子どもとの話し合いを多くし、子ども自身の手で計画し実現できる内容を考え、取り入れることによって「家族の一員」としての位置付けを強くし、「信頼されている」という自信を与えていき、子どもの自主的言動を助長する力となっている。

現在は、対象とする患児が少なく、また、その変化にも個人差が有るため、今後も患児達の家族への働きかけを多くし、行動観察と性格テストを継続実施し、その変化を追ってまとめていきたい。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<研究目的>

独立歩行が可能な状態から、次第に歩行困難となり、日常生活の移動動作すべてに車椅子を使わなければならないという事態に直面した時、患児達とその顕著な変化をどの様に受け取め、対処していくかについて彼らの行動観察及び家族とのかかわりの中から捉え、彼らの情緒面での安定を図り、より広い視野を持って豊かに成長していくための援助の方法を考え、試み、「生活指導」というものを深める。